【論文】

千葉県君津市豊田地区における出羽三山信仰の継承

高畑　友香

Ⅰ　はじめに

日本のように複雑で重層的な宗教観を持つ国は，地球上の文明国として，ほとんど類例がないという（岸本 1961）．その中でも日本独自とされる信仰の一つに，山を信仰対象とする山岳信仰がある．山岳信仰の代表的な拠点として，出羽三山（山形県），大峯山（奈良県），英彦山（福岡県・大分県）が挙げられる．このうち，出羽三山は月山・羽黒山・湯殿山のことであり，それらを崇拝対象とする出羽三山信仰は，江戸時代には東日本一円に信仰が広まった．現在でも東日本の各地で，三山碑[1]などの出羽三山信仰の痕跡，あるいは宗教行事を確認できる．中でも千葉県は，関東地方において，出羽三山信仰が最も盛んな県であり，現在も出羽三山麓の宿坊[2]から御師[3]が巡回に来る地域がかなり多く存在している（岩鼻 1992）．

小田（2014）によると，山岳信仰，修験道をテーマとした研究は増加傾向にあり，出羽三山信仰を対象とした研究では，有賀，岩鼻による一連の研究がみられる．

有賀（1972），岩鼻（1983）の研究では，信仰集落をとりあげ，各宿坊が持つ檀那場（霞）[4]の広さが宗教集落の発展に大きく関係している，と指摘している．すなわち，門前町が市場機能を有するのに対し，山岳宗教集落は，市場機能が発達せず，収入源となるものが少ない．このため，夏季の宿坊機能，冬期の配札祈祷[5]がかろうじて収入源となり，一般的な門前町よりも広い檀那場を必要とするということである．つまり，出羽三山信仰が日本の三大霊山となるにあたり，広大な檀那場が重要な要因であったことが明らかになった．

この檀那場を，岩鼻，有賀の双方は，崇拝対象の山岳を中心とした同心円空間モデルの圏構造として理解し，岩鼻（1981）を例に挙げると，「奥宮が立地する山頂近辺の聖なる場所を聖域圏，里宮の立地する山岳宗教が核となる山麓部を準聖域圏，末社・分社が分布し，信徒が居住する周囲の平地を信仰圏とする圏構造」と定義している．他の研究者が定義する際も，言葉は若干異なるものの，いずれも，広範囲にわたる檀那場は，ここでいう「信仰圏」にあたる地域であるといえる．

この「信仰圏」を対象とした信仰圏研究は，民俗学において研究が進められてきた．岩鼻（1983）は，民俗学における信仰圏研究が，各地の民俗事例や信仰形態の違いによって信仰圏内部を区分していたのに対し，信仰の分布，その濃淡から信仰圏を設定しなおした．ここで岩鼻は，信仰の分布を表す指標として講[6]・末社[7]・三山碑を用いている．そして，分布による信仰圏の検討によって，出羽三山に近接した秋田県・青森県において分布が希薄であるのに対し，遠く離れた千葉県で濃密な分布が見られることを指摘し，距離関係では信仰の分布の濃淡を必ずしも説明できないと述べた．この信仰の分布の濃淡を説明する要因として，岩鼻は，人々が属する仏教の宗派の違いによる民間信仰の受容態度の違い，他の競合する規模の霊山の有無，明治の神仏分離令・修験道禁止に対する各藩の宗教政策の違いの３点を挙げている．

また，関東の出羽三山信仰を検討した岡倉（1981）は，千葉県の出羽三山信仰の注目すべき特徴を，分布の濃密さ・広さ以外に，長期にわたって継続されている点を指摘している．その要因として，岩鼻と同様に，仏教の宗派ごとの民間信仰の受容態度の違いを挙げている．岩鼻，岡倉両氏の研究は，千葉県において強い信仰がみられる要因を明らかにするものとしてきわめて重要であった．

しかしながら，岡倉（1981）が指摘したように，千葉県の出羽三山の特徴は，分布の濃密さ・広さ，つまり多くの地域で「受容」されたということだけではなく，長期にわたって「継承」されている点にある．従来研究で指摘された要因は，いずれも初期に「受容」された要因であり，現在まで日常的に「継承」されている要因はまだ明らかになっていないように思われる．

そこで，本稿は千葉県の出羽三山信仰がなぜ現在までも「継承」されているのか，その要因を明らかにすることを目的とする．

Ⅱ　研究方法

千葉県の出羽三山信仰に関しては，對馬，岡倉らによって各地域の詳細な事例調査がなされている．對馬（1980）によれば，下総では千葉市37，佐倉市５，白井市７，印西町（現印西市）３，四街道町（現四街道市）５，沼南

町（現柏市）３，船橋市６の計66カ所の檀那場が確認されている．岡倉（1981）によれば，このほかに，市原市・木更津市･長生郡長柄町などに,檀那場を確認している．また，各市の市史にも紹介されている．檀那場の分布だけではなく，出羽三山に参詣したことを記念して建てられたとする三山碑の分布も分析し，房総地方の三山信仰は近世初頭から始まっており，分布はほぼ県内全域に及んでいることを指摘した．さらに，小林（2013）は，千葉県各地から34組の梵天[8)]を集め,北総地域,内房北部,内房南部，外房の四つの地域に分けて，登拝の頻度，梵天の様相，記念碑建立の多寡など信仰形態の相違を指摘している．

このように，千葉県における出羽三山信仰の宗教儀礼や，その歴史自体に着目した研究は数多くみられ，大きな成果を挙げている．しかしながら，宗教を受容している地域や人々の社会・経済的な変化という視点での考察は限定的である．

一方，宗教地理学においては，社会・経済的なアプローチによる宗教・信仰集団の変化を扱っている研究がみられる．小野寺（2005）は，明石市東二見を事例に，伊勢講が地域社会の経済・社会的な変化の中でいかに変容してきたかを明らかにしている．また，中條（2001）は，島根県仁多町阿井地区を事例に，高度経済成長期以降の講集団の変化を，人口動態や村落社会構造の変化と結びつけて考察した．いずれも講組織の変化について述べた論文であるが，講活動は千葉県の出羽三山信仰においても重要な役割を担っているため,出羽三山信仰の「継承」要因を明らかにする本稿においても，社会・経済的なアプローチが有効であると考えられる．したがって，まずは国勢調査・君津市市統計書などの統計資料，郷土誌，民俗調査報告書から出羽三山信仰の受容時から現在までの対象地域の社会的変化を明らかにする．次に，その中で，個々の宗教儀礼がどのような役割を担い，継承されてきたのか，資料だけでは不明確な部分を，現地での聞き取り調査・観察調査によって明らかにする．

聞き取り調査・観察調査は，予備調査として４月８日に亀山連合行合同の祈願祭，９月８日と10月８日に豊田地区の八日講に参加し，行人の方４名に，八日講・奥州参り・活動概要についてお聞きした．宗教儀礼は，千葉県内の地域特有の行事もみられるが，本稿では，おおむね県内のどの地域でも共通してみられる八日講[9)]と奥州参り[10)]を対象に分析する．

本稿で研究対象地域として取り上げたのは，千葉県君津市豊田である（図１）．中條（2001）が指摘するように，第二次世界大戦以降，高度経済成長期に，日本の農山村は都市地域・工業地域の影響を受けてきている．君津市は，高度経済成長期に，埋立地に新日鐵の君津工場を誘致したことで，臨海部において急激な発展を遂げた町である．また，臨海部の急激な変容による需要拡大によって，内陸部においても，ダムの建設，砂利の採取による山の消失など大規模な開発がなされた．さらに，対象地域は３度の市町村合併を経験している.以上のことから，豊田は経済･社会的な変化を経験してきたと推測される．一方で，出羽三山への信仰は現在も厚く，多くの地区で１年に数回となった八日講を現在も月に１度続けており，実際に出羽三山へ行く奥州参りについても，近年も何度も登拝している地域である．したがって，この地域の経済・社会的な変化，宗教儀礼が地域で果たしてきた役割を知ることで，現在まで信仰が継承されてきた要因を考察することができると思われる．

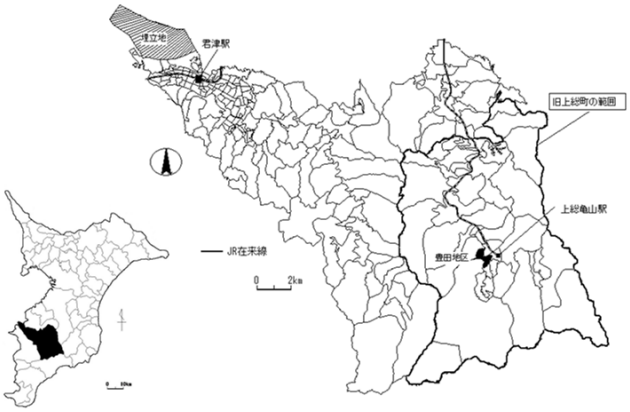

図１　研究対象地域

Ⅲ　千葉県君津市豊田地区の概要

君津市は千葉県中部の内房側に位置する．臨海部は京葉工業地域の一部であり，1965（昭和40）年に創業した，世界最大級の製鉄工場である新日鐵住金君津製鉄所を中心に，鉄の生産を主産業とする．一方，内陸部は，房総丘陵の一部で，標高200ｍ台～300ｍ台の低い山々がみられ，自然を生かした観光業が盛んである．

本稿で対象とする大字豊田旧野中と豊田旧菅間田（以下二つの大字を合わせて豊田地区と呼ぶ）は，君津市の内陸部に位置し，面積は，豊田旧菅間田が112,829㎡，豊田旧野中が424,180㎡と,君津市の中では小さな部類の地区である．1873（明治６）年から千葉県の管轄になり，1877（明治10）年４月に菅間田村，野中村の二村を合併して豊田になった．1889（明治22）年に豊田を含む13の村が合併し,亀山村を形成した.その後，1954（昭和29）年に久留里町，松丘村，亀山村が合併し，上総町に，1970（昭和45）年に君津町，小糸町，清和村，小櫃村，上総

町が合併し，現在の君津市となった（図１）．1980（昭和55）年に完成した亀山ダムによってできた，県下最大の人口湖である亀山湖があり，観光地として人気を集めている．

交通は，電車では1936（昭和11）年にJR久留里線が延長され，上総亀山駅があるほか，国道465号線，国道410号線，館山自動車道，東京湾アクアラインなどが主な経路となっている．ただし，公共交通機関はいずれも１時間に１本以下の本数なので，住民の主な移動手段は，自家用車である．したがって，首都圏へのアクセスはもちろん，県庁所在地の千葉市に対しても遠隔地にあると言える．最も近い都市である君津市・木更津市の中心市街地までは40分強かかる．

君津市住民基本台帳によれば,2015（平成27）年10月末現在，豊田旧菅間田の人口が23人，世帯数が11世帯，豊田旧野中の人口が75人，世帯数が29世帯である．豊田地区全体の人口は1985（昭和60）年をピークに減少傾向であるが，世帯数は微増傾向にある．過疎化の方向に進んでいるかは，資料では判別できなかった．一方，高齢化率（32.7%）は君津市全体の高齢化率と比較すると，大きく上回っており，高齢化は進んでいると考えられる．

また，豊田地区の歴史について,『亀山村誌』（亀山市市史編さん室 1996，原著は亀山尋常高等小学校 1914）によると,「村民ノ生業ノ多クハ農業ニシテ副業トシテ山林ノ経営，木材製造及薪炭製造等ニ従事ス」,「土地平坦ナラザレドモ小櫃川沿岸ハ稍々耕地富ミ地味肥沃ニシテ灌漑ノ便アリ，米穀ヲ産ス」とあり，もともとは農家が多い地域であったこと，小櫃川を利用した灌漑用水を引いていたため，畑だけではなく，水田を作ることができたことがわかる．また，亀山村は，上総唐箕と呼ばれる農具で有名で，製造のために出稼ぎする者も多かった．上総唐箕の製造は他の副業よりも稼ぎがよい仕事であった．

昭和初期には全国的な農業恐慌の影響で，不況に陥ったが，各区で「農業計画」を作成し，対策を行った．1930（昭和５）年の君津郡の町村別生産価額の割合では農業が70%を超えていることからも，当時亀山村で農業が盛んであったことがわかる．

『上総町郷土史』(上総町教育委員会 1969)によれば，戦後の昭和20年代，豊田地区が位置した上総町では，長男が家を継ぐという家制度の伝統が変化し，農家の家業を継ぐ者が減り，都会に職を求めて若者が出ていき，町の人口は年々減っていった．過疎化の対策として，上総町では工業の誘致をはかり,従業員50～100人の６工場の誘致に成功したという．

昭和30年代には，臨海部が京葉工業地域の南部拠点として，鉄鋼コンビナートが急速に発展した．同時に，団地の形成，大型店舗の出店により消費の中心地も，臨海部に移動した．内陸部では，臨海部の都市整備・公共施設建設への需要に応じて砂利の採掘を行い，財源確保に努めたが，臨海部との財政格差が拡大し，これをきっかけに五ヶ町村の合併につながった．同時に，内陸部では兼業農家が増加し，勤めに出る人が増えた．

『亀山ダム工事誌』（千葉県 1981）によると，ダム建設によって水没する君津市笹，豊田，川俣，藤林，坂畑，草川原，折木原の７地区の住民は,「小櫃川，その支川沿いに点在する農地を耕作して生活を営んでいたが，耕地面積は１戸あたり80ａ以下と少なく，生活の維持は農業以外の山林所得・臨海部工業地域への通勤による収入に依存しなければならなかった.」とあり，耕地として肥沃であるとされていた小櫃川沿岸でさえ，専業農家はほとんどなくなりつつあったことがわかる．また，昭和50年代～60年代は，旧上総町の地区全体の農家総数，専業農家，兼業農家をみると，いずれも減少傾向にあることがわかる．

現在は，豊田旧野中，豊田旧菅間田の両地区ともサービス業従事者が他の職業の従事者よりも人数が多い．周辺には宿泊施設や貸しボート店などがみられるため，亀山湖を観光資源とする，観光業・宿泊業の従事者であると考えられる．一方，農業従事者はわずかに１名と，農家を専業とはしていないことがわかる．

Ⅳ　千葉県君津市豊田地区の概要

１．豊田三山講の活動概要

現在，豊田地区をはじめとする旧亀山村は宮下坊の檀那場となっている．昭和30年代に宿坊をやめた渡辺坊の檀那場を譲り受けたそうである．その時に，渡辺坊から譲り受けた宿泊者名簿である「房州上総檀那御祈祷帳」によれば，千葉の檀那場からの宿泊者は元禄時代から記録されている．また，1934（昭和９）年以降に書かれたとされる亀山村蔵玉地区の「経済更正生活改善実践規定」の中では,「伊勢詣，奥州詣其他之ニ類スルコトニ餞別，饗応，土産ハ之ヲ廃スルコト」とあり，伊勢参りや奥州参りが当時の生活で身近なものであったことがわかる．

つづいて，豊田の出羽三山信仰の組織について概観する(図２)．

三山講の組織は，講員からなっている．１度でも三山に登った人は講員となる．１世帯１人の代表者が出ることがほとんどだが，後継ぎとなる世代の人が講員となって，２人の世帯もある．そのため，世帯主である60歳代

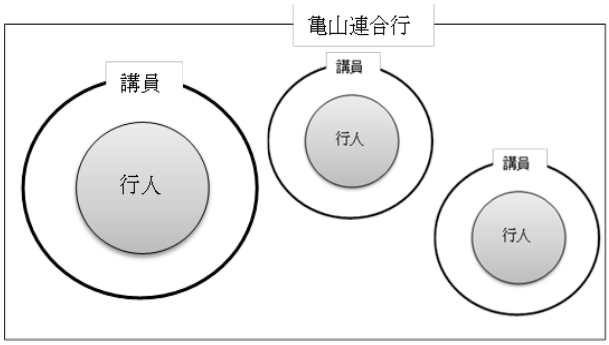

図２　対象地域における出羽三山講組織の模式図

～70歳代の男性がほとんどだが，40歳代～50歳代の人もいる．長男は，若いうちに月山に１度は登っておかなければならないと，親が亡くなったあと講員を継げないので，多くの人は地区の先輩に早めに行っておくように勧められ，また，本人も自然にそう思うようになるそうである．現在，豊田地区では21世帯が出羽三山講の講員となっている．以前はほぼすべての世帯が講員であったが，後継者がいなくて講員をやめた世帯が５世帯あった．しかしながら，現在講員の21世帯では，後継者がいないという心配はなく，講員の減少は，それほど深刻なものではないようである．

講員の中で，八日講に参加している人を行人という．八日講は，豊田では平日・休日関係なく毎月８日の午前８時（11月から４月は９時）から午後１時まで行っている．多くは行人が，講員の中から八日講に誘うかたちで行人となり，参加は強制的ではないが，平日に参加可能なのは，仕事を引退した70代以上の講員に限られてしまう．減少が著しいのは講員よりもむしろ行人で，その後継者不足が問題視されている．

旧亀山村の他地区も，奥州参りの際に，同じ宿坊を利用しているため，祈願祭など合同で行う行事もある．この旧亀山村の行人の集まりを，亀山連合行という．連合「行」であるため，もともとの参加者は行人だけであったが，近年は八日講をやめ，行人のいない地区もあるため，各地区の講員が参加している．連合の会長・副会長・経理の役割分担がある．他地区でもそれぞれ八日講，奥州参りを行っていたが，近年は行人の人数が減ってきたことにより，従来男性だけしか入れなかった講に女性も入れて存続する講や，消滅してしまった講もある．また，2014（平成26）年に初めて，亀山連合行での奥州参りに行った．

行事は，地区の公衆施設である豊田青年館で行われる．豊田では，１ヵ月に１度毎月８日に行われる八日講のほかに，７月末に一緒に山へ登った人達で行う「同行講」と呼ばれる講が開かれる．現在は年齢で二つのグループに分けて行っている．同行講では，豊田青年館で出羽三山の描かれた掛け軸，梵天を前に祈願を行い，その後，ホテルに移動し，「なおらい」と呼ばれる共同飲食が開かれる．また，１月の初めには講員の世帯に，宿坊からお札が配られる．

各地区で行われる八日講の集大成として，４月８日に宿坊の御師を呼び，亀山連合行で合同の祈願祭を行う．晴天時は亀山湖の湖畔で祈願が行われる．祈願は三山拝詞と三語拝詞で，節回しは多少異なるが，内容は出羽三山で行われているものと同じである．祈願のあとは，同行講と同様に，ホテルに移動し，なおらいが行われる．

千葉県宗教法人名簿によれば，君津市では真言宗の寺院が67.0％を占めている．県全体の37.6％と比較すると県内でも真言宗寺院の割合の高い地域であるといえる．富津・木更津・袖ヶ浦などの周辺地域でも真言宗の占める割合が高く，この地域一帯で真言宗が信仰されていることが見て取れる．旧亀山村の地域の寺院は，真言宗智山派である．したがって，岩鼻（1983），岡倉（1981）が指摘した仏教の宗派による民間信仰への受容態度の違いという仮説に，豊田も合致しているといえる．豊田では，盆正月の付け届け，盆供，施餓鬼などの仏教行事が行われており，仏教への信仰心，寺院とのかかわりも深いことがわかる．ただし，寺院と出羽三山信仰が競合しているというわけではなく，別物という認識である．また，仏教行事は日程に偏りがあるのに対し，八日講は１ヵ月に１回定期的に開催されるため，行人に限って言えば，行事の頻度が１番高く，最も身近な信仰であると考えられる．

地区内には寺院のほかにも，神社が三つあるが，出羽三山信仰とは関係のない神社で，祭りなどの行事が行われることもない．また，三山講と競合するような民間信仰の話も聞かなかった．『亀山民俗調査　川俣・豊田を中心として』（千葉県君津市教育委員会 1975）によれば，豊田では八日講のほかに，既婚女性が集まり，子安神を祀り安産を祈願する子安講，伊勢皇大神宮の掛け軸を前に，神酒をささげ飲食する伊勢講，世帯主のみが公会堂に集まり飲食をする氏神講・甲子講などがあったと記述されていたが，現在はみられない．当時の八日講については，「毎月８日の日に行われ，出羽三山の月山，羽黒山，湯殿山にお参りに行った人が集まって祈願する．今日では老人の集まりとなっている．公会堂などに，自分たちでご馳走を持ち寄り，飲食する．豊田では１ヵ月おきくらいに行われている．」と記述されており，当時から八日講に集まる行人は，高齢者が中心であったことがわかる．

地域の自治組織には青年会，理事会がある．青年会に

ついて，千葉県君津市教育委員会（1975）では，「加入年齢は中学卒業後，22歳ごろまで．小さな部落なので，22歳でぬけると数名しか残らず運営が困難になるので，後継ぎができるまで50歳になっても入会していた．青年会も種々の理由により，解散となり現在に至る．」との記述がある．現在の青年会は，地区の高齢者を招待する長寿祈願祭などの祭りを主催しており，40歳代～50歳代の会員もいるそうである．

また，理事会からは，八日講に対して補助金が出ている．理事会・青年会のメンバーと講員はほとんど同じメンバーのため，八日講にも理解があり，八日講に補助金を出すことも不自然なことではないようである．以上のことから，出羽三山信仰は地域の中で浸透している民間信仰であると考えられる．

２．八日講と梵天

豊田地区では梵天（写真１）のことを「オボンゼン」と呼ぶが，ここでは混同を避けるために，「梵天」と記述する．

八日講で梵天を作るには，竹細工，紙細工，それらを紐で結んでいくという三つの工程があるため，少なくとも３人以上の行人が必要となる．行人が３人未満になると，八日講は続けられない．そのため，行人の数が維持していくことは，八日講を継承していく上で極めて重要なことである．しかしながら，現在はどこの地区でも行人の数は減少傾向にある．旧亀山村の地区でも，行人の数が３人未満になってしまったため，奥州参りは行っているが，八日講は消滅してしまった地区が存在する．

歳入は，理事会からの補助金がでる．また，行人が亡くなった時に，家族が梵天の作成を依頼する場合は，その代金から徴収する．歳出は，竹は竹林から持ってくるため，紙細工のための書道用紙と紐，カッターなどの道具を購入する代金が必要となる．行人が八日講に参加する上でのハードルは，金銭的な負担よりも，時間の負担である．現在，豊田地区で八日講に参加する行人は５人である．先述の通り，平日・休日にかかわらず８日に行うため，参加者は仕事を引退した高齢者に限られる．行人の方によれば，「最近では70を過ぎないと入ってくれない」そうである．理由は「忙しい」がほとんどで，60歳代以降も働く人の増加と自動車利用の増加による移動距離の拡大が要因として考えられる．

梵天の作り方は地区によって少しずつ異なる．そのため，行人になり，梵天の作り方を継承していくことができるのは同じ地区の住民に限定される．また，作り方は口伝えによるものなので，八日講に参加し，実際に先輩

写真１　豊田地区で作られた梵天

（2015年４月８日　筆者撮影）

が梵天を作るところを見て教えてもらい，自分で作ることでしか継承していくことができない．梵天の個々のパーツには意味が込められており，折り目の数や紙の切り方，紐の結び方などが決まっている．さらに，八日講に参加できるのは本来であれば，男性だけである．行人の人数が少なくなり存続が危ぶまれたために，女性も加わった地区もあるが，それは例外的で豊田地区では伝統に則り，現在も男性限定である．そのため，そもそも行人になる候補者は限られている．だからこそ，地域の人口の減少傾向が，八日講の行人の減少に直接影響を与えるものと考えられる．現在の行人が八日講を続けていく理由は，「先輩が続けてきたことを自分たちの代で終わらせたくない」という思いが根底にある．

八日講を続けていくことは，奥州参りを続けていくこと，すなわち講員の世帯数の維持と出羽三山信仰の継承をしていく上でも重要なことである．毎月梵天を作っていると，毎年ではなくても，「そろそろ出羽三山に行こうか」「たまには行こうか」という気持ちを持つそうである．実際に，奥州参りの呼びかけは，行人からすることが多い．千葉県を含む信仰圏においては，出羽三山までの距離が遠く，交通費・宿泊費などの費用もかかるため，何度も出向くことが難しい．その上，山容が視界に入るわけでもないため，出羽三山を想起する機会は出羽三山から近い距離にある信仰圏に比べ，少なくなる．その中で，出羽三山につながる梵天を作り，出羽三山に登る際に身につける白衣・腰梵天を身につけて，三山拝詞・三語拝詞を唱え，出羽三山の掛け軸を前に祈願する八日講の一連の流れは，出羽三山を想起させる重要な機会となる．宿坊から御師が直接出向く亀山連合行合同の祈願祭，直接出羽三山へ行く奥州参りは八日講よりも出羽三山を想起するインパクトがある行事ではあるが，それぞれに年に１回，数年に１度のことなので，月に１回の八日講は

頻度の点では最も影響力が大きい．八日講と奥州参りはそれぞれ単独ではなく，お互いに影響を与え合って，信仰を強めていることがわかる．

『君津市史　民俗編』（君津市市史編さん委員会編1998）によれば，かつては行人になることによって，俗人とは別の一段高い位階に進むという信仰があった．行人は村人の中でも高い地位に置かれ尊敬を集め，亡くなると行人墓地にまつられたという．豊田地区においても，行人は各家の墓とは別に，「行人塚」と呼ばれる行人の墓があったそうだが，現在は行人でも家族と同じお墓に埋葬されるそうである．また，八日講に参加する行人の方によると，「子供の頃自分が見ていた行人は，神様のような存在で立派な人だと思っていた．その行人が作った梵天は，一部でも落ちていたものを踏んでしまうと足が曲がると言われており，絶対に踏んではいけないと思っていた．」という．当時の行人が，地域の中で特別神聖な存在として尊敬されていたことがわかる．

３．奥州参りと三山碑

奥州参りは交通の利便性が増すまでは大変苦労を要する行事であった．そのため，現在亀山湖カントリークラブというゴルフ場になっている月ヶ峰という山が月山に似ていることから，旧亀山村周辺に住んでいた先祖は，月ヶ峰を「月山様」と呼んだ．そこに本宮を置き，崇め奉っていたという記述が，1991（平成３）年に建立された記念碑にみられる．この地区をはじめ，君津市の内陸部では，昭和50年代頃から多数のゴルフ場が開設されるようになった．亀山湖カントリークラブのオープンは1996（平成８）年と他のゴルフ場よりもやや遅めだが，同じ流れの中のゴルフ場開設だと思われる．同記念碑には，開発した株式会社東京ベイサイドリゾートによって，本宮・土地の造成がなされ，亀山湖畔に本宮を移転したことが書かれている．現在は，八日講の集大成である亀山連合行合同の祈願祭がこの本宮の近くで行われる．また，奥州参りに行ったメンバーの名前が刻まれる記念碑が多数みられる聖地となっている．登拝記念碑には昭和40年代から新しいものでは2000（平成12）年のものもあり，近年も豊田地区の出羽三山信仰が厚いことがわかる．

近年の奥州参りは，月ヶ峰を祀った先祖の頃のように，行くだけで大変な苦労を要するというわけではないため，実際に出羽三山に登拝している．何歳までに行かないといけないという明確なルールはないが，既述のように親が亡くなった時にすぐに講員を継ぐために，若いうちに少なくとも１度は月山に登る必要があると考えられている．団長・副団長を決めて，希望者の団体で行くが，だいたい同年代で行っていたようである．現在の行人の方が初めて出羽三山に行った1983（昭和58）年の奥州参りでは，東北新幹線を利用して行った．当時からレクリエーション的な要素もあり，宿坊へ行く前に最上川ライン下りに行き，宿坊の館長に「あとで観光にしなさい．信心が先です」と怒られたことをよく覚えているという．その後は，観光はあとにしているという話もされていた．このように，現在においても千葉県から山形県へ行くのは，時間的・金銭的にもコストがかかることなので，三山へ行くだけではなく，近くの観光地へも立ち寄って帰るそうだ．冬場は月山には登れないので，1983（昭和58）年の奥州参りは７月に行われた．標高1,984mとそれほど高い山ではないので，特に若い人にとっては，山に登ること自体は大変ではなかったそうだが，まだ雪が残っており，雨も降り，寒い風が下から吹き上げ，霧で前が見えない，体から湯気が出るほど寒かったと語っていた．観光ではないので，「楽しいばかりというわけではないが，思い出にはなる」そうだ．　一緒に山へ登った人達はお互いに同じ思い出を共有しているので，話が通じやすいように見えた．

また，最近では若い世代が登拝に行く際に，行人を含む上の世代の人も一緒に行くことも増え，さまざまな年齢の人が一緒に登拝している．「同じ地区の人はほかの人よりも話が合う」と話しており，気の置けない関係であることが見てとれた．さらに一緒に登拝した経験を共有することで，同年代で一緒に山へ登った人と同じように，異なる世代の人達も，話が通じやすくなり，縦のつながりが強化されているのではないかと考えられる．

昔は亀山地区合同で登拝していたが，しばらく豊田は豊田だけで登拝する期間が続いた．最近になって宿坊から豊田の世話役の方に，「ぜひ亀山地区合同で来てください」と言われ，2014（平成26）年は亀山地区合同で羽黒山，湯殿山に行った．ただのレクリエーション・地域のつながり強化の役割であれば場所はどこでもいいはずだが，豊田地区では最近では2004（平成16），2009（平成21），2010（平成22），2013（平成25）年に三山登拝をしている．年齢が上がってくると，途中で怪我をする可能性もあるため，月山は登拝せず，羽黒山・湯殿山だけという場合も多いが，時間的・金銭的コストがかかるにもかかわらず，これだけ何度も同じ場所へ行くのは信仰する気持ちの強さが表れているといえる．三山は，ほかの場所とは違う特別な場所になっているのである．

ほかの場所と違う特別の場所となった要因として，まず，先述のように，毎月八日講を行っている行人の影響は大きい．次に，宿坊との関係も大きいと思われる．１

年に１回とはいえ，亀山連合行合同の祈願祭の時には，実際に宿坊から御師が訪れる．また，世話役とは電話などでより密度の高い交流をしている．更に，目に見える聖地が現在も残っていることが挙げられる．現在は以前よりも容易に実際の月山へ登拝できるようになったとはいえ,月ヶ峰から遷宮した目に見える聖地があることは,出羽三山信仰を想起させ，出羽三山をほかとは異なる特別な場所になるために，重要な役割を担っていると考えられる．

Ⅴ　おわりに

本稿では，出羽三山信仰の信仰圏，特に山容を直接視認できない遠隔地である千葉県君津市の豊田地区において，出羽三山信仰が継承されてきた要因について，対象地域の社会的特性とその中で宗教儀礼が果たしてきた機能に着目して検討した．

まず，郷土史や統計資料から，豊田地区は高度経済成長期における臨海部の急激な発展による影響を受けてきたことを明らかにした．亀山ダムの建設，月ヶ峰の開発によるゴルフ場開設，専業農家の減少，観光業の増加はその例である．これは豊田地区のみならず，君津市の内陸部におおむね共通した特徴といえそうである．田林ほか（1996）は，こうした変化によって，祭礼や講が果たす役割が低下することを指摘している．しかしながら，豊田地区の出羽三山信仰は，現在も継承されている．継承されている要因として，もともとは地域全域で信仰されていたために，理事会・青年会などの地域の自治組織ともつながりを持っていたこと，転居などによる世帯数の減少が多くみられないことが挙げられる．

次に，資料ではわからない宗教儀礼が地域で果たす役割を，実際の宗教儀礼の調査・信仰している行人の方々への聞き取り調査から，明らかにした．特に大きな宗教儀礼として，毎月８日に行われる八日講と，講員になるための通過儀礼的な役割を担う奥州参りを例に挙げた．八日講，またその集大成として位置づけられる亀山連合行合同の祈願祭は，時間的なコストがかかるものの，直接山容が視認できない信仰圏において，梵天作り・祈願という一連の作業は，出羽三山信仰を想起させ，奥州参りなどより大規模な宗教儀礼への動機となっているものと考えられる．規模の面では，亀山連合行合同の祈願祭や，奥州参りよりも小規模ではあるが，月に１度という頻度の面で，他を圧倒する出羽三山を想起させる機能を担っている．しかし，退職する年齢の上昇と自動車による移動距離の拡大によって，行人になる年齢が上がってきており，行人の減少，八日講の廃止に至る地域もみられ，行人の減少は深刻な問題となっている．

また，月山を模した聖地である月ヶ峰の本宮を開発に伴ってなくしてしまうのではなく，移転させたことも，宗教的な場所となり，日常の中で出羽三山信仰を想起させる機能を持つことになったと考えられる．

一方，奥州参りは，講員を引き継ぐために，１度は行かないといけないという自然発生的な義務感が最初の動機ではあるが，同じ地区に住む人々の連帯を強める上で重要な役割を担っていることがわかった．近年は，人口が減少傾向なこともあり，同年代だけではなく，異なる年代層，同じ地区だけではなく，亀山地区合同など形は変わりつつあるが，講員の数は維持することができている．

山岳信仰は，他の講集団と比べて明確な信仰の中心点があることが特色である．そのため，従来の研究では，中心からの同心円的な信仰圏モデルが指摘されている．その中で，距離的に遠いにもかかわらず，分布の密度が濃く，現在に至るまで信仰が続いている千葉県は，例外的な位置づけである．そのため，信仰が「受容」された要因についてはたびたび検討されてきたが，近年の変化を踏まえて「継承」されてきた要因についてはいまだ考察がなされていなかった．

本稿では，出羽三山信仰が，対象地域において継承されてきた要因を，対象地域の経済・社会的な特性，宗教儀礼の役割に注目して明らかにしてきたが，千葉県全体を扱うことはできなかった．本来ならば，近隣地区の中で，三山信仰が残っていない地域との比較を通して考察していく必要があろう．この点に関しては，今後の課題としたい．

謝辞　現地調査にあたっては，宮下坊の宮下洋典様に数多くのご協力を賜りました.豊田地区の皆様,亀山連合行の皆様には,聞き取り調査・現地調査に快く応じていただきました．また，本稿では触れることができなかったものの，予備調査でお邪魔させていただいた八千代市下市場の講中の皆様には，祈願祭の訪問に快く応じていただきました．本稿を作成するにあたっては，水野勲先生をはじめとする地理学コースの先生方に始終ご指導を賜り，生活文化学講座宮内貴久先生にも数多くのご教示を賜りました．末筆ではありますが，以上の方々に厚くお礼申し上げます.

注

1）三山参詣を記念して造立される石碑である．中心に月山，その両脇に羽黒山，湯殿山を配するかたちが多い．ほかには，三山参詣に行ったメンバーの名前，造立年などが書かれてい

る．寺院や堂の境内，墓地などで見られる（君津市市史編さん委員会 1998）．

2) 寺院や神社の参詣客の宿泊所のことをいう．山岳宗教集落に位置する宿坊は，祭祀権を有する山伏集団が霊山への参拝客を泊める宿泊施設を指す（岩鼻 1992）．

3) 社寺と崇拝者の間にたち，山岳信仰を伝播する役割を果たした人々である（大塚民俗学会 1994）．

4) 宗教の信徒が居住する領域．出羽三山の檀那場は，布教活動によって，山形をはじめとする東北各県および関東地方に広がった．関東地方では檀那場，東北地方では霞と呼ぶ（岡倉 1978）．

5) もともとは仏教の宗教儀礼であったが，民間信仰でもみられるようになった（大塚民俗学会 1994）．出羽三山信仰でも１月に宿坊から各家に札が配られる．

6) 結社集団．大別して経済的動機で結集するもの，宗教信仰上の目的を達成するために結集するものの2つに分かれる．前者は後者の発展過程で出現した2次的なものである．出羽三山信仰をはじめとする山岳崇拝に基づくものは後者にあたり，修験道の色彩が濃い．（大塚民俗学会 1994）

7) 従属の地位にある神社をいう．出羽三山信仰では，羽黒神社・出羽神社，湯殿山神社，月山神社がある．（大塚民俗学会 1994，岩鼻 1992）

8) 出羽三山信仰の講で作成される．神がおりる依り代として，また場合によっては行人の身代りとしての意味が与えられているように見受けられる．地域によって作り方は異なるが，材料はどの地域でも半紙，竹，紐が使われる．（小林 2013）

9) 出羽三山講，三山講，羽黒講という場合もある．名称の由来は，空海の湯殿山参籠の日と伝えられる４月８日にちなむ．行屋など公共の場に集まり，三山拝詞や経文を唱和する点はどの地域も変わらない．行屋でボンテンを３本作り，三山碑の前にたてるところもある．（岡倉 1978）

10) 出羽三山に参詣すること．ふつうは村落ごとの集団で行く．（岡倉 1978）

文献

有賀密夫 1972．出羽三山を中心とする山麓信仰集落について．地域研究 13(1)：37-42.

岩鼻通明　1981．観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌．人文地理：33：458～472.

岩鼻通明 1983．出羽三山を巡る山岳信仰集落．地理学評論56：535-552.

岩鼻通明 1992.『出羽三山信仰の歴史地理学的考察』名著出版.

岩鼻通明 2003.『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院.

大塚民俗学会 1994.『日本民族事典【縮小版】』弘文堂.

岡倉捷郎 1978．上総木更津の出羽三山信仰．あしなか 159：１-31.

岡倉捷郎 1981．関東における出羽三山信仰－その分布と三山講の性格・諸相．まつり 38：15-48.

小田匡保 2014．戦後日本の宗教地理学（続）－宗教地理学文献目録の分析を通じて．駒澤地理 50：55-68.

小野寺淳 2005．伊勢参宮における講組織の変容－明石市東二見を事例に．歴史地理学 47(1)：4-22.

亀山尋常高等小学校編 1996.『亀山村誌』君津市教育委員会教育部市史編さん室.

上総町教育委員会編 1969.『上総町郷土史』第一法規出版.

君津市市史編さん委員会編 1998.『君津市史　民俗編』千葉県君津市.

岸本英夫 1961.『宗教学』大明堂.

小林裕美 2013．梵天に見る出羽三山信仰の現在．千葉県立中央博物館研究報告　人文科学13(1)：１-81.

田林　明・若本啓子・中村康子・舩杉力修・冨田直伸・久保京子 1996．結城市大木地区における地縁組織の変容．地域調査報告 18：67-89.

千葉県君津市教育委員会 1975.『亀山民俗調査　川俣・豊田を中心として』千葉県君津市教育委員会.

千葉県 1981.『亀山ダム工事誌』千葉県.

對馬郁夫 1980．下総地方の出羽三山信仰．歴史手帖 8(5)：24-29.

中條曉仁 2001．過疎山村における講集団の変化と村落社会－島根県仁多町阿井地区の事例．地理科学56：211-231.

たかはた・ゆか

YKK株式会社

Mt. Dewa-sanzan Religion Reproduced in Contemporary Social Life: The Case of Toyoda District in Inland Chiba Prefecture

TAKAHATA Yuka (YKK corporation)